



水族館の 輝かせ方

水族館プロデューサー
中村元

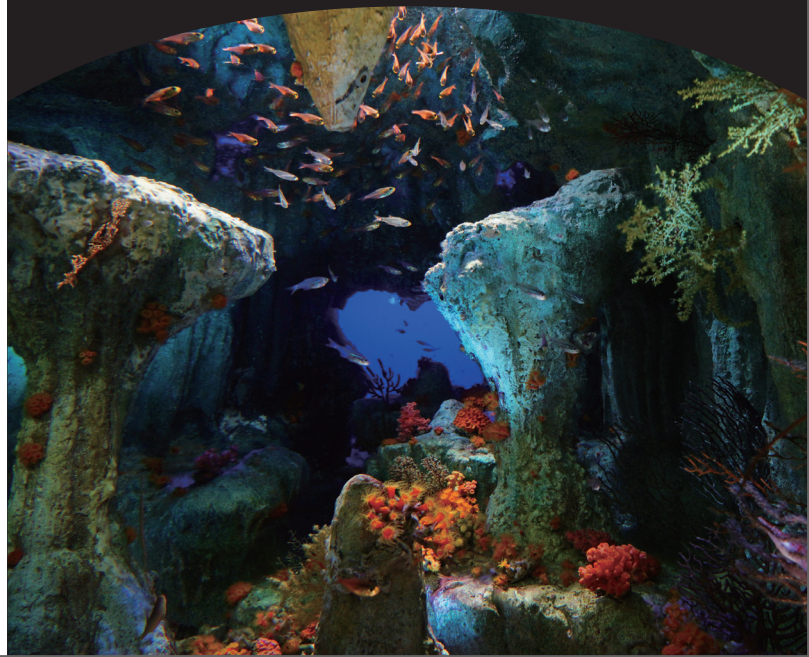


「新江ノ島水族館」や「サンシャイン水族館」をはじめ、さまざまな水族館をプロデュースしてきた中村元^{はせめ}さん。多くの関心を集め、大勢の人が足を運ぶようになるような「水族館の輝かせ方」についてお話を伺った。

海洋生物に関心を示さないお客さん

私は子どものころから魚に興味があったわけではありません。それが、大学の経済学部を卒業し、いろいろな事情が重なって水族館に就職することになりました。一方、職場の同僚である水族館の職員は、大学で海洋学や水産学を学んだ魚が大好きな人たちばかりです。彼らの多くは水族館を子ども向けの教育施設としてとらえていて、展示のことにはさほど関心を持っていませんでした。そうした環境で働きながら、私は水族館の常識や既成概念に対して徐々に違和感を抱くようになっていったのです。

同僚たちはお客さんよりも海洋生物に目を向けていましたが、私は逆でした。そして、お客さんの動向に着目すると、意外なことが次々と分かったの



です。その勤務先の水族館では一番の見どころとなる水槽を、順路の最後の方に設けていました。でも、多くのお客さんは一番最初的水槽こそ凝視するものの、順路の後半になるほど興味を失っていくのです。平均すると、お客さんが3秒以上見ている水槽は全体の半分もありませんでした。お客さんは入館してすぐの水槽こそじっくり見ますが、あとはだいたい水槽を横目で見ながら家族や友達と会話を交わしています。水槽の横に掲示された解説に目を向ける人もほとんどいません。たいていのお客さんは、ヤマメとイワナの違いやアオウミガメとアカウミガメの見分け方などに関心を示さないのです。そうしたお客さんの動向を目にして、はたと気が付きました。私と一緒に、お客さんは海洋生物にさほど関心がないのだと。

では、お客さんは水族館に何を求めているのか。私は「沖繩美ら海水族館」を訪れた際に、「水塊すいかい」という言葉を思い浮かべました。水塊とは海洋構造の区分を表す用語なのですが、私が考えたのはそれとは別の意味です。水槽を前にしたときに感じられる清涼感や浮遊感、まるで水中を漂っているかの

ような非日常的な感覚などのことを、私は水塊と呼ぶようにしたのです。

この水塊という考えを思い付いたのは後年になってからですが、水族館に勤め始めてしばらくすると、お客さんは海洋生物そのものよりも水の動きなどに興味があることに気が付きました。例えば、ミズクラゲはクラゲの中でも一番ポピュラーで際立った特徴はありませんが、多くの水族館で人気を博しています。お客さんはミズクラゲを見て「触手がこうなっているのか」などと関心を寄せているわけではありません。ミズクラゲ独特の浮遊感、水中をふわふわ漂う様子に心をひかれています。そうしたことに少しずつ気付くようになり、私は海や川から水の塊を切り取ってきて、その水中の光景を水槽に再現するような展示方法を試行錯誤するようになりました。

ミュージカルで気付いた照明の妙技

光の屈折の関係から、水中は空気中と比べて3分の2程度の距離感に感じられます。私が水族館に勤め始めた30年以上前、水槽の照明は蛍光灯で明々

と照らすことが主流でした。水槽全体を照らすことで海洋生物をきちんと見せるという考えからですが、掃除などのメンテナンスがしやすいという裏事情もありました。ただでさえ距離感が縮まってしまう水中を蛍光灯で明るく照らすと奥行きが感じられなくなり、絵画のように平面的になってしまいます。例えば、擬岩と呼ばれる人工の岩を手前と奥に並べて置くと、水槽の中に奥行き感を出すことができます。でも、蛍光灯に照らされた水槽の中では2個の擬岩が一塊のように見えてしまい、奥行き感が失われてしまうのです。それでも水槽の上から照明で水中を照らし、水のきらきらした動きを見せるなどの工夫をしましたが、思い描く展示にはほど遠い状態でした。

展示手法に悩んでいた時期に、知人からミュージカルに誘われました。ミュージカルに興味はなく、渋谷足を運んだのですが、幕が上がると私は舞台に目を奪われました。そのミュージカルが面白かったからではありません。舞台には書き割りという大道具が置かれています。木や紙で作られた平面的なものですが、書き割りにさまざまな角度から光を当てることで立体的に見

えるように工夫されているのです。そして、舞台の奥にはホリゾン트가あります。そのときはまだホリゾン트という言葉も知らなかったのですが、グレーの壁や幕に照明を当て、青空や夕暮れを表現していました。そのホリゾン트가あることで、実際にはさほど広くない舞台がとても奥行きのあるものに感じられたのです。その舞台を見ながら、ぐっと視界が明るくなりました。

舞台照明の工夫を、早速、水槽にも取り入れました。2個の擬岩の間に照明を置く、あるいは水槽の上から擬岩の間を照らす。そして、水槽の奥に青く塗った板を置いてみる。すると、格段に水槽の奥行き感が増したのです。後年になってからですが、ホリゾン트의板を半透明のものにし、後ろ側から照明を当てると、さらに奥行き感が増すことも分かりました。照明の工夫次第で水槽の中でさまざまな表現ができることを知った私は、水中のリアルな光景を再現したいという思いを強くします。水槽の隅々まで照らして海洋生物をしっかりと見せることが主流だった当時、水槽の中に暗がりを作ることとはタブーも同然でした。でも、実際の海や川の中には陰影があるし、リアルな

光景を再現した方がお客さんの興味をかき立てることができます。多少メンテナンスが面倒になったとしても、客足が伸びた方が良いに決まっています。そうした思いから、既存の水族館の常識にとらわれず、さらに自分なりの展示手法を模索する道を突き進むようになっていきました。

青い海水を感じさせる二重三重の照明

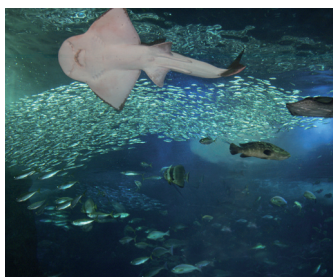
手ですくうと分かりますが、一般的な海水は無色透明です。では、なぜ海は青く見えるのか。空の色を映しているから、あるいは太陽光線が散乱した結果など諸説あるのですが、決定的な答えは出ていないそうです。私は何も海水が青い理由を解明したいわけではありません。大切なことは「海は青く見える」という事実です。水族館の水槽を前にしたお客さんに水中にいるような感覚を味わっていただくには、いくつかの大切な要素があります。水の動きや光とともに重要なのが、青い水なのです。そこで、半透明のホリゾントに青い光を当てるなど、さまざまな工夫を凝らしているのです。



サンシャイン水族館の「サンシャインラグーン」(左)と「サンゴ礁の海」



新江ノ島水族館の「相模湾ゾーン」の水槽(2枚とも)



北の大地の水族館の「滝つぼ水槽」(左)と「四季の水槽(川が凍る水槽)」



平成17年にリニューアルオープンした新江ノ島水族館では「ニッポンの水族館」というコンセプトを掲げ、相模湾の海中を再現した水槽を設けています。古来から日本人は、海に対して感謝と畏敬という相反する思いを抱いてきました。親しみもあるけれど、同時に恐れている。そうした日本人の感性に訴えるため、相模湾を再現した水槽は擬岩をたくさん置いて照明を暗くし、あえて何が潜んでいるのか分かりづらくしました。ただ、大きな擬岩がごろごろしていると、水槽の奥のホリゾントからの青い光がお客さんまで届きづらくなります。そこで、青い照明で擬岩を照らすようにしたのですが、それだけでは十分ではありません。水槽の手前上方にも照明を設置し、お客さんの足下を青く照らすようにしたのです。こうした二重三重の青い光により、まるで青い海水に包まれてるような独特の感覚を楽しめると思います。

制約の中で生まれる創意工夫

平成23年にリニューアルオープンしたサンシャイン水族館は、ビルの10階と11階にあります。そのため、天井が低く、柱が多く、水量をあまり使えないなど、多くの制約がありました。沖縄美ら海水族館の最大の水槽の奥行きは約27メートルあります。それに対し、サンシャイン水族館の最大の水槽は奥行きが約10メートルしかありません。それでも、沖縄美ら海水族館に引けを取らない水塊の感じられる水槽にしたいと思っていました。

サンシャイン水族館のメインの水槽のホリゾントには、上から下に向かってグリーン、ブルー、グリーンとグラデーションをつけた布を用いました。そこに後ろから照明を当てると、お客さん側からは奥に壁があるように感じられず、どこまでも水中が続いているように見えるのです。また、いくつかの水槽に白砂を敷きました。白砂に照明が当たると反射した光が水面に映り、陽光（サンシャイン）のように見えるからです。水面を波立たせる装置を水槽の上に取り付けて、水の動きを見せることができます。でも、サンシャイン水族館では水槽のすぐ上を梁が通っているため、そうした装置を取り付けることができません。そこで、きらきらとした特殊な照明で、お客さんの足

下を照らすようにしました。あたかも水槽内が波打っているかのような、水の躍動感をお客さんに感じていただくためです。

平成24年に北海道にオープンした「おんねゆ温泉 北の大地の水族館」には、冬になると氷が張る世界初の水槽があります。この水族館でもさまざまに照明の工夫を凝らしていますが、紙幅が尽きました。ここまで述べてきた水槽の照明のことは、あくまでも裏側の話。水族館を訪れた際は「あそこの照明が」なんてことは気にせず、ただただ水塊に心身を委ねてください。そうすれば、日常生活では味わえない得も言われぬ心地良さを体感できるのですから。(談)



なかむらはじめ●昭和31年、三重県生まれ。成城大学卒業後、鳥羽水族館に入社。同水族館を副館長で辞職し、水族館プロデューサーとして独立。「新江の島水族館」「サンシャイン水族館」「おんねゆ温泉・山の水族館」と続けてリニユアールを手がけ、いずれも奇跡的な集客増に成功させた。東京コミュニケーションアート専門学校教育顧問。全国の観光地再生アドバイザリーなどの他、日本バリアフリー観光推進機構および伊勢志摩バリアフリーツアースセンターの理事長を務める。「中村元の全国水族館ガイド115」(長崎出版)をはじめ、著書多数。
<http://www.web-aquarium.net/>